

皆様こんばんは、常磐津文字兵衛でございます。今日はお招きありがとうございます。黒岩会長、呼んでいただきありがとうございます。創立会長、さぞかし大変でいらっしゃると思います。お茶の水RCでしたでしょうか、自分のクラブの「卓話者のリスト」があり、呼んでくださいリストがあるのですが、そこに載せていただいているのでお茶の水さんから呼んでいただいて、その時に来ていただいてそのご縁でまたお呼びいただきました。

私は、歌舞伎の演奏に従事しているものですからスケジュールがなかなか直前までわからないのでご迷惑をおかけしました。歌舞伎は概ね何月に誰が何処に出るかはわかっていて、役者さん達・俳優さん達は誰が何処に出るか決まっているのですが、演目が2ヶ月前にならないと決まらないのです。

私の推測ですが、あの人がこれをやるのに私がこれじゃいやだとかいうので決まるのがぎりぎりの2ヶ月前だと思うのです。演目が決まると一挙に、今回は常磐津の演目があるから来て下さいと言われるのです。それでびっくり仰天して他のスケジュールを調整したりすることが多々あります。

7月にお電話をいただいた時、ちょうど私は大阪の松竹座に出ていて「大阪うつぼロータリー」の友達とご飯を食べていまして、なんだかよくわからない返事をしてしまい、大変失礼をいたしました。ロータリーの友達はあっちこっちに沢山増えて1カ月ずつ各公演地にいるものですから、ご容赦下さいませ。

今日は「江戸のタイムカプセル常磐津」。常磐津というのは三味線音楽の一種なのですが、今、実際の生活の中で三味線の現物を見ることは少なくなりました。この私が使っているのは中竿三味線、竿の太さが中ぐらいのもの。長唄で使うのは細竿三味線。義太夫で使うのは太棹三味線という具合で各三味線音楽のジャンルで使う楽器が微妙に違います。

中竿三味線は比較的音が長く伸びてチャリンという割と金属的な音がします。長唄三味線は竿が細くて打撃音です。「速いパッセージを弾いて勝負」みたいなところがあります。中竿三味線は比較的ゆったりとしたテンポで弾くのを得意としています。

この三味線という楽器、原型は中国からの輸入品です。中国の直接の原型は「サンシェン」ですか？発音ありますか？大体竿の長さもこれに似たような楽器が中国にあります。これが1500年の中盤後半くらいに大阪の堺に上陸し、そこからまたたく間に日本中に広まった、という楽器です。

最初、輸入当時は今沖縄にもそのかたちが残っていますが、中国のサンシェンもそうですが、蛇の皮が張ってありました。ところが日本には原材料になるようなそんなに大きな蛇はいないので、紆余曲折の結果、猫の皮を使っています。これは国際的にいろいろとまずいことがあって、一般的には猫の皮ということはいけません。ここにポツポツと黒いマークが出ているのがおわかりでしょうか？4つ見えるのですが、これは猫のおっぱいです。猫を飼っていらっしゃる方はおうちに帰って猫のおっぱいを勘定してください。8個あります。理論的には一匹から2枚取れるということになります。結局このおっぱいの跡、左右対称に出ていますね、動物の皮というのは真ん中が厚くて両側が薄くなっているのです。要するに振動体として左右対称型というのは非常に優れた振動をします。だからこの皮に落ち着きました。一般的などころでは言いませんが、大学の授業では全部お話しています。

これはやはり中国からの外来楽器なので、結構外来の素材が多い。竿は紅の木と書きますが、紅木(コウキ)というものでインドからの輸入材です。この糸巻きに常磐津は、黒檀を使っています。これもアジア原産ということになります。この胴の木はタイ国原産のカリンの木。のど飴のカリンではなくて根っこを美術品にする硬い木のカリンの木があるのですが、それを使っています。

かろうじて弦だけは国産で、絹糸の弦を使っています。琵琶湖の周りに工場が多いです。この弦の振動を皮に伝える駒自体は象牙です。三本弦の楽器は中近東から中国にかけてずっと分布して日本までやってきたのですが、他の三味線型の楽器は爪をつけたりピックで弾きますが、日本は大きなバチで弾いています。振り回すのが大変なのですが、日本に三味線が入ってきたときに最初に三味線を持って弾いたのはどうも琵琶法師だったらしいのです。琵琶のバチ、雅楽で使う琵琶のバチ。それが一般的な琵琶のバチになった。そのバチで三味線を弾いたので我が国の三味線はこの形のバチで弾くことになった。

結局重いものを振り回すのは大変なのだけれども、その代わり我が国の三味線は比較的大音量というものを手に入れました。現在でも、私達常磐津チームは三味線三人、浄瑠璃、要するに歌パートですね、歌パート四人という編成でやっています。マイク等は一切使わずに生の音で上演します。ちょっと音を聞いてみましょう。

<三味線演奏①>

という比較的大きな音です。ここらの広さでは全然問題ないくらいの音です。戦国時代の前、関が原の前までは記録によると泥棒から戦国大名まで弾く楽器になっていた。前田利家が家来の弾いているのを見たという記録とか、泥棒が弾いて遊んでいるのを聚楽第の途中で召し捕ったとか、秀吉の時代にはすでに泥棒までが弾いていたという楽器なのです。日本に突然来た外来楽器があつという間に広まった、そういう楽器だったのです。

以前、ギターを弾いていると不良だと言われませんでした？黒岩会長。言われましたよね。これもそうだった。不良が弾いているのだと思われていた。不良というのは普通と違うこと。それをカブキモノ(傾寄者)といいますよね、傾いているからカブキモノなのです。ということで、カブキ舞踊、カブキ舞っている人達がやっていた新しい芸能、カブキと共に発展してきました。

ようやく「私のタイムカプセル」の話になりますが、常磐津節というのは1747年江戸時代中期に江戸で成立した江戸浄瑠璃です。浄瑠璃というのは何か。関西では義太夫を浄瑠璃と言われますが、あれは大阪浄瑠璃、上方浄瑠璃です。常磐津は江戸浄瑠璃です。浄瑠璃は何か、「語りもの音楽」という意味です。では「語りもの音楽」とは何かーセリフがある。歌舞伎でもセリフがありますがそれをそのまま三味線音楽の中に取り込んでしまいました。

1800年代の常磐津の代表曲、「将門」という曲からセリフの部分聞いてみましょう。大宅太郎光国(おおやのたろうみつくに)という武将が妖怪退治に来た。そこに絶世の美女、傾城如月(けいせいきさらぎ)が現れて、これは実は平将門の娘という設定になっています。色仕掛けで仲間になろうとする曲の一部分です。

「大宅の太郎は目を覚し、将門山の古御所に、妖怪変化棲家を求め、人倫を悩ます由、頼信公の仰を受し光国が、暫し目睡む其内に、見慣ぬ座敷の此体は、正しく変化の所為なるか

「申し／＼光国様

「扱こそ変化ござんなれ、イザ正体をと立寄る光国、女は慌て押しめ

「ア、申し、様子言ねばお前の疑念、私は都の島原で、如月といふ傾城で御座んすわいな

「ヤア心得難き其一言、波濤を隔てし此国へ、傾城遊女の身を以つて、来り住べき謂れなし、よし又都の遊女にせよ、ついに見もせぬ其方が、何故我をと不審の言葉

というような具合です。役が違えばセリフを言うのも違いますが、常磐津に全部なってしまった場合は全ての役をひとりで演じることができる。実際、常磐津だけの演奏の場合でも、演奏上では何人かに分けることが多いのですが、ひとりですべてのパートをやってしまう、ということもあります。

先ほどは武士と傾城が出てきました。これは江戸時代当時でも時代劇が強く、私達が見る「水戸黄門」みたいな感じだった。それと同時に当時の江戸の風俗を色濃く映したという曲も残っています。その中でも、当時江戸の人達はこう話していただろうなという言葉、セリフが沢山残っています。

今日はその中から、これも常磐津の代表的な作品なのですが、天保14年1843年、江戸で初演された「乗合船恵方万歳(のりあいぶねえほうまんざい)」という曲から聞いていただきます。

お正月の江戸、隅田川、船が一艘浮かんでいる。これは渡し舟なのだけれどもそこに七人乗っている。大工、芸者、三河万歳、合計7人乗っているんです。舟に七人、これは七福神の見立てなのです。お正月の演目でそういうおめでたいそれぞれがちょっとずつ踊るという舞踊組曲みたいなものですが、この中から1843年ですから時代的にはあと25年たつと明治維新です。そういう時代の江戸の文化が、いい安定した時代にできた曲です。

セリフのコウヤクというかそれぞれ何と言っているかということ現代風に訳して聞いてからセリフを演じるとわかりやすいじゃないかなと思います。

まず、三河万歳、三河から出てきているから江戸弁ではない言葉で喋っています。「ただの渡し舟かと思っていたら、きれいなお姐さんが沢山いるじゃない、これはありがたい、ありがたい」と万歳の二人が話していると、万歳の太夫、ちょっと年かきの分別のある人が、「そんなにキョロキョロするな。女性ばかり見てありがたがっていたら田舎から来たのが丸出しじゃない。女のいない国から来たみたいでみともないからよせ」と言うわけです。

そうすると「折角三河から来たのだから女性を見るのも楽しみのひとつじゃないか」と言います。そうするとここで「通人(つうじん)」という人が出てきます。これは俳句のお師匠さんみたいな人なのですが、とてもオシャレ。でもオシャレ過ぎてキザ。現代風というと鼻持ちならぬくらいキザな人。

その通人が「皆さんも女性が好きだと思いますね」なんてことを言う。そうすると江戸っ子の大工が出てきて、「そんなことを言っていないで、“袖振り合うも多生の縁”だからみんなでそれぞれ何か少しづつ話さない」なんてことを言うと芸者が出てきて、「ほんにそれがようござんしょう」と言うふうに追従を言います。

そうすると大工が「これはお正月だから」白酒売りも一緒に乗っているんですが、白酒売りに「お前、先に何かやってください」と言うと白酒売りが「じゃあひとつやりましょうか」といって舞踊組曲が進んでいくというものです。そういう部分を聞いていただこうと思います。

<三味線演奏②>

今日は、常磐津というのはこんなもんかなというお話ができればいいかなと思っていたので、次にいきたいと思います。

アジアの三味線にはついていないキコウが日本に入ってきてからつくようになりました。「サワリ」というキコウなのですが、ちょっと裏にネジがついてサワリの効果、竿の一部が糸に触れることによってしびれた音になる。これは日本の三味線に独特の効果です。津軽三味線は私達の三味線からはとても遠い親戚なのですが、これがついています。沖縄の三線にはついていません。ということで日本の三味線にはサワリがついています。「ちょっとサワリだけ聞かせてよ」、と言うのはこれかな、違うかなという感じなのですが、一部がさわってピョーンと響くのがサワリと覚えておいてください。ピョーンという音、

これが重要。ちょっとエコーがきいたみたいなそういう感じの響きです。

今日は三河万歳をやろうかなと思ったのですが、今日、「内藤新宿のとうがらし」のお話をされましたよね。常磐津にはとうがらしを歌ったのがありますのでそれを演じようかなと思います。

「栗餅」という曲です。天保、江戸時代に出来たもので、「栗餅売り」というのがいたんです。栗餅の曲搦き(きょくづき)をして甘いお餅を二人組で臼と杵を持ってきて、曲搦きをしているような格好をして搦きながら細かく切って、それをポイポイと投げながらお菓子に作り上げて売っていた「栗餅売り」というのがいたらしい。それを舞踊に映した曲があり、その最後の部分の総踊りー「総踊り」というのは、いろいろと物語を進めていきながら全員で景気よく踊る部分があるんですが、本調子の第2弦を長2度上げて一音上げて二上がりするのですが、そのなかで江戸の田園風景をわざわざ歌った歌がある。庭の鳥がかわいいね、というような田舎風の雰囲気を出すのです。

「さっこいさっこい かわいいおとこの めをやさます」

その後、「しょうしょうかんらくとも なんばんばたけで やってくよ」という歌詞が出てきます。「なんばん」これ、つまり唐辛子です。「ちょっと辛くても逢引は唐辛子畑の中で」みたいな意味合いだと思います。その中でちょっとだけ「なんばん畑」が出てくるのですが、今日「内藤新宿とうがらし」のご本を見て思った。あ、こんなに唐辛子畑があったのだ、それで「ちょっと辛くても唐辛子畑」なんだと思った次第です。

<三味線演奏③>

(拍手)

ちょうどお時間になったようですが、ちょっとだけ常磐津とはどういうものかということで三味線と常磐津を聞いていただきました。また呼んでください。それぞれの曲とか面白い話題が沢山あります。またいつでも来させていただきます。2カ月前にご連絡をいただければ絶対あいているのでよろしく願いいたします。今日はありがとうございました。(終わり)

<閉会点鐘 黒岩会長>

今日は本当にみなさんお勉強になりましたでしょうか。(拍手)ロータリーというのは、遊びばかりではなく、文化的な教養も身に付けながら我々も豊かになっていくのだらうと思います。常磐津文字兵衛さんは本当に大変なお方なのです。十年も前に普通は70歳を超えていただくような「紫綬褒章」を受章された。大変なものなのです。本当に業界では第一人者として日本のみならず外国でも御活躍なさっています。これからも益々お元気で20年、30年と謳歌していただければと思います。(拍手)

また遊びに来てくださいませ。

それでは第28回目の例会を終了させていただきます。(終わり)